

野球拳らしさについて

※「野球拳らしさ」とは、

- 「野球」を連想させる振り付けや小道具が使われているか
- 「野球拳」のテーマである「応援」や元気を与えるようなパフォーマンスであるか
- 郷土芸能である「野球拳」を深化させた「おどり」であるか
(野球拳に内包される松山の文化や歴史などが伝わるものであるか)

【野球拳おどりとは】

大正時代に生まれ、昭和、平成、令和の時代に、全国の人に愛されてきた「野球拳」。そのルーツは、野球の普及に尽力した、松山出身の俳人「正岡子規」を育てた風土、野球に情熱を傾けてきた地域の思いがある。これを夏まつりにと、半世紀にわたって、「野球拳おどり」が愛媛、松山でおどり継がれている。

野球拳の成り立ち

大正13年(1924)10月、高松市の屋島グラウンドが完成し、その記念として近県実業団野球大会が催された。当時、西日本に名が轟いていた強豪の伊予鉄電(現伊予鉄道)も遠征した。対戦相手は、水原茂(元巨人軍監督)らを擁する高商・高中クラブ連合。結果は、8-0で伊予鉄電野球部の完敗だった。その夜、高松市内の旅館で懇親会が開かれ、宴席は隠し芸の競い合いとなつた。芸達者揃いの高松勢の前に、またもや伊予鉄電ナインは意氣消沈。そうした仲間を奮い立たすために生まれたのが、この踊り。作者は、当時の伊予鉄電野球部の前田伍健(当時は五剣)副監督であった。

川柳作家でもあった伍健が『元禄花見踊』の曲をアレンジし、即興で歌を作り、別室に部員を集めて振り付けを教えた。そして、伍健の歌と三味線に合わせ、「野球するなら こういう具合にしやしやんせ……ランナーになつたら エッサッサーアウト セーフ ヨヨイノヨイ」全員がユニホーム姿で踊りを披露すると、大いに受け、座は盛り上がり、夜の部は伊予鉄電の大勝利となつた。昼の負けはともかく夜の勝負に勝つた一行は、揚々とこの踊りを松山に持ち帰り、松山の料亭での「残念会」(あくまでも、野球の試合では負けていた)の場で披露した。以後、宴会芸の定番となる。



本家野球拳歌詞

作詞：前田伍健(1番)、富田狸通(2~4番) 作曲：前田伍健

一 野球するなら こういう具合にしやしやんせ 投げたら こう打って 打いたら こう受けて ランナーになつたら えっさつさ アウト セーフ よよいのよい じやんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい	三 本家野球拳 こういう具合に若返ろ 投げたら こう打って 打いたら こう受けて 日本国中 えっさつさ アウト セーフ よよいのよい じやんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい
二 踊りするなら こういう具合に野球拳 投げたら こう打って 打いたら こう受けて 釧廻もエンマも えっさつさ アウト セーフ よよいのよい じやんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい	四 ホンニーそうじやけん こういう具合にやりましょや 投げたら こう打って 打いたら こう受けて 道後のブンブにえっさつさ アウト セーフ よよいのよい じやんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい